

中国新疆ウイグル自治区の民族問題とは何か
大西 広（慶應義塾大学）

最近のウイグル問題での西側キャンペーンは香港問題同様、中国のナショナリズムを強めるという最悪な結果を招いている。特に、殆どがフェイクなウイグル会議情報に依拠した圧力となっていることも問題である。私は2008年3月にホータンであった「デモ」の実態を調査して、ウイグル会議情報が現実を何百倍に水増しして伝えていることを確認した。また、綿花摘みの「強制労働」なるものも調査したことがあるが、それも十数年前の話、かつ現在の目を見張る改善を知らなければならない。そして、自治区外への集団就職の「強制」というものも、殆どが存在しないことをウイグル族サイドで行った現地調査で確認している¹。ただし、「殆どない」ということは「100%ない」ということを意味しない。大雑把に推測して1%程度には「行きたくない」と思う人をも送り出しているのではないだろうか。報告では述べなかったが、それらしき傍証も存在する。「貧困撲滅」を課題として言い渡された末端行政官の官僚主義的対応が予想されるからである。

したがって、私はウイグル会議情報の99%がフェイクであったとしても、それでも「民族問題は深刻」と捉えている。これは、毛沢東が1953年に「大漢族主義を批判する」という文章で以下のように述べたと同じ意味においてである。すなわち、

「少なくない材料から判断するに、一般に少数民族がいるほとんどの地方には未解決の問題があり、一部の問題は極めて深刻であると中央は認識している。表面上は落ち着いていて問題ないように見えるが、実は問題が深刻である。この2,3年間各地で現れた問題はいたるところで大漢族主義が存在していることを証明している。我々は現在時機をつかんで教育を行い、党内および人民の間の大漢族主義を徹底的に克服しなければ、とても危険である。」（中共中央文献研究室・中共西藏自治区委員会・中国蔵学研究中心編,2008）

以上総じて述べたいのは、「西方化」という名の新自由主義を別とすれば、現在の中国で警戒されるべきはナショナリズムである。これには、習近平を引きずり込む「大漢族主義」と「大国主義」のナショナリズム、香港「民主派」の排外主義、ウイグル会議の民族主義、そして、日本民衆の反中ナショナリズムが含まれる。なお、この内容は、この9月に発行予定の『社会主義理論研究』創刊号掲載の論文で詳述している。

¹ 「綿花摘み」の調査は新疆大学の先生方とともにいったもの、労務輸出の調査はウイグル族ネットワークで行ったものである。ただし、「これは調査です」といって正確な調査ができる環境にはないので、周到なバイアス排除の措置をして行った。なお、この労務調査に関わる内容は、大西編『中国の少数民族問題と経済格差』京都大学学術出版会、2012年で公表している。参考にされたい。